

単身世帯の住生活と住要求に関する研究 (第1報)

—居住者特性, 住生活—

鈴木 博 志

(名城大学理工学部)

平成5年3月8日受理

A Study on Residential Life and Housing Needs of One-person Households (Part 1)

—Characteristics of Residents, Residential Life—

Hiroshi SUZUKI

Faculty of Science and Technology, Meijo University, Nagoya 468

The purpose of this report is to clarify the residential life and the housing needs of one-person households. For this purpose, the survey was carried out to the residents of apartments at the 5 areas of Tokyo in 1990.

The findings are as follows;

(1) The young age group of one-person households are about 50% of the one-person households and the middle and upper age groups are about 50%. Most of them are low income, and live in the rented apartments.

(2) The main occasions to live alone are different among the age groups. The nearly 30% of the young age group prefer to live alone in future.

(3) The one-person households are lately to go to a bed and lately to get up, and lately coming home. The upper age group go to bed more earlier, but do not always get up more earlier. The frequency of house keeping works is fewer for male, but it is more for the upper age group.

(4) The intention of live to be worth investing are varied by the sex and the age groups. The male show the intention that the association with others is important.

(5) The one-person households show the tendency of negative attitude to associate with neighbors. The female are concerned with living securely, and intend to live in the midtown area.

(Received March 8, 1993)

Keywords: one-person households 単身世帯, residential life 住生活, characteristics of residents 居住者特性, apartments 共同住宅.

1. はじめに

近年, 大都市地域を中心に単身世帯の増加は著しく, 複数人数からなる一般世帯と同様に一つのライフスタイル(シングルライフ)を確立しつつある。東京都についてみれば, 1965年の単身世帯数は59万世帯, 全世帯数に占める比率19%(1970年国勢調査)であったものが, 25年後の1990年には, 168万世帯, 36%

(1990年同調査)にまで大きく増大している。

かつて単身世帯といえば, 10代, 20代の若年層が大半であった。しかし, 近年では若年層に加えて, 中・高年層の単身者の増加が目立ち始めている。この社会的背景には, 大都市地域における男女の人口比のアンバランス, 職場での就業形態の変化, 結婚や人生に対する価値観の変化などが関係していよう。今日で

は、女性でも仕事を持って自立することが一般的となり、結婚や家庭にそれほどこだわらない女性が増えつつある。また、ワンルームマンションの建設、コンビニエンスストアの登場により、都市の単身者にとって生活がしやすい環境になったことも影響していると思われる。

こうした変化のほかに、高齢単身者における増加も顕著である。老人の世話をその家族がみる家族制度の習慣が崩れる中で、高年齢期での配偶者との死別が高齢単身者の増加につながっている。また、家族がいても単身居住を余儀なくされるケースもある。企業の転勤による単身赴任者であり、背後には子供の教育、老人の世話、持ち家の管理などの問題がからんでいる。

このように、社会の状況や家族のあり方が変化の中で単身世帯が増加し、その階層性や単身化の契機も広範囲に多様化している。そのため、単身世帯の居住実態に関する研究が徐々に取組み始められ、一部には示唆に富む成果を得ている。しかし、それらは住宅統計資料を利用した単身者のマクロな居住状況の分析¹⁾、若年や高齢単身者の居住実態の分析²⁾³⁾、高齢単身者の居住空間の検討⁴⁾など、いわば特定の階層を対象にそれぞれ個別の課題に対して行われた分析に留まるものが多い。すなわち、単身世帯の住生活や住要求を全体的、体系的に把握、検討したものは、著者の渉猟する範囲では見当たらない。したがって、本研究ではその点を踏まえ、単身者の階層別に①住生活、居住空間、住まいに対する住要求や志向などがどのように異なるのか。また、②それが複数世帯と比較していかなる特徴を持つのか、その全体像を明らかにすることが必要である。それによって、単身世帯の居住上の課題を把握し、住宅施策の検討に資することができるものと考えられる。本報では、このうち居住者特性、単身化の状況、住生活の状態、住宅や住まい方に対する考え方を報告し、次報以降で居住水準、居住評価、転居計画、住要求・志向、ライフスタイルなどを報告する予定である。

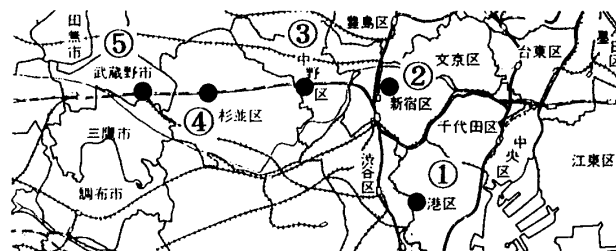
2. 調査概要

(1) 調査の概要 (表1)

単身世帯は、多様な階層から構成されている。今回の調査では、その中の主要な階層を抽出して全体像が把握できるように、単身者が最も多く居住している共同住宅（分譲マンション、鉄筋コンクリート造賃貸アパート、木造賃貸アパート、このうち設備共用タイプ

表 1. 調査の配布回収状況

	① 港区	② 新宿区	③ 中野区	④ 杉並区	⑤ 武蔵野市	計
配布数	329	534	458	472	438	2,231
有効回収数	143	268	287	274	311	1,283
うち単身	65	123	179	155	173	695
〃 複数	78	145	108	119	138	588
有効回収率	43.4%	50.2%	62.7%	58.0%	71.0%	57.5%



【調査地区】

- ①港区：西麻布3丁目周辺、[木賃アパート]は少ないが、[鉄賃アパート]、[マンション]はかなり多く分布し、一部には高級マンションの地区も含まれる。
- ②新宿区：西大久保3丁目周辺、典型的な[木賃アパート]地区であり、主要道路沿いに規模の大きい高層の[鉄賃アパート]、[マンション]が目立つ。
- ③中野区：中野5丁目周辺、[木賃アパート]および小規模な[鉄賃アパート]が多い。[マンション]等比較的大規模な中高層アパートは限られる。
- ④杉並区：荻窪4丁目周辺、[木賃アパート]の密集度は高くないが、広範囲に分布している。[鉄賃アパート]、[マンション]は駅周辺に多く、新規のものが目立つ。
- ⑤武蔵野市：吉祥寺本町2丁目周辺、低層の[木賃アパート]が多く、中高層の[鉄賃アパート]は少ない。[マンション]もごく一部に限られる。

図 1. 調査地区の概要

は建設量、シェアとも小さいので除く)の居住者にアンケート調査する方法をとった(1988年東京都住宅統計調査：単身世帯の民間共同住宅の割合は、全住宅の74.2%に相当)。調査地区内の全数調査としたため、2人以上の複数世帯も同時に調査することになるが、これによって同一調査区内で単身世帯と複数世帯の比較が可能になる利点がでてくる。また、本調査の前にあらかじめ予備調査を実施し、調査対象世帯の確定、住宅利用状況の観察を行った。本調査は、質問紙留置自記法で直接配布、回収を原則とした。調査時期は、1990年6月15日～7月25日、回収状況は、表1のとおりである。

(2) 調査地区の概要 (図1)

調査地区の選定は、調査対象の共同住宅が多く分布したエリアであることを、都心から郊外までエリアが広範囲に分散することを基準にした。そのため、住宅地図帳による共同住宅の分布、国勢調査ベースの単身世帯の分布を検討し、さらに現地の視察を加えて、図1に示される5地区を選出した。このうち①港区を除い

単身世帯の住生活と住要求に関する研究（第1報）

て、②新宿区、③中野区、④杉並区、⑤武蔵野市とも中央線沿線の駅周辺地区であり、交通の利便性はかなり高い。いずれの地区も単身世帯比率、民営借家比率が50%を越えるような地点を多く含み、典型的な単身居住地区と言える。

(3) 調査内容

調査内容は、居住者の属性、単身化の背景、住生活一般の状況、住宅や住まい方に対する意見、現住宅の水準、現住宅の意識評価、住み替えと転居計画、住要求や住宅サービスの要求である。

(4) 分析方法

単身世帯の特性を明らかにするために複数世帯とのクロス集計、および単身世帯の階層別にクロス集計を行った。ここで、複数世帯については、調査の質問項目によって世帯員個人の属性に関わる内容と、世帯員全員に関わる内容とがあることに留意する必要がある。調査は原則として世帯主の立場で回答を求めているため、以後の分析で、日常生活の時間については世帯主個人の特性が表れ、また生活の志向、住宅や住まいに対する考え方は世帯員全員の状況に規定されながら世帯主の意識が表れる傾向にある。家事の頻度については、世帯主より世帯員全員に関わる状況が反映されると考えられる。

単身世帯の階層区分は、性別と年齢を軸にした。年齢層の区分は、単身化の状況によって、大きく29歳以下の若年層（未婚の単身者が多い年齢層）、30～49歳の中年層（結婚によって単身者が急減し、単身を生涯のライフスタイルとするものが多く残る年齢層）、50歳以上の高年層（夫や妻との死別による単身化が増加し、加えて定年退職や高齢化に伴って生活に大きな変化が生ずる年齢層）に分けて考えることができるが、年齢別の変化をより明確に把握するため、中年層と高年層をさらに2区分して、10歳階級の年齢層を設定した。

なお、単身世帯は[単身]、複数世帯は[複数]、単身世帯の男性は[男]、女性は[女]と表記し、分譲マンション、鉄筋コンクリート造賃貸アパート、木造賃貸アパートは、それぞれ[マンション]、[鉄賃アパート]、[木賃アパート]と表記する。また年齢層は、10歳階級ごとに[～29歳]、[30歳代]、[40歳代]、[50歳代]、[60歳～]と表記する。 χ^2 検定、 t 検定の結果は、有意差が0.1%未満、1%未満、5%未満の場合は、それぞれ***、**、*で表す。

3. 結果および考察

(1) 居住者の基本的特性

1) 世帯区分、性別（表2）

調査地区内では、世帯区分は[単身]が54%、[複数]が46%である。単身世帯の性別は[男]が54%、[女]が46%で男性の方がわずかに多い。

2) 共同住宅の型（表2）

住宅型では、[単身]は[木賃アパート]が52%、[鉄賃アパート]が38%で、単身世帯では賃貸アパート居住が多くを占める。昭和63年住宅需要実態調査

表2. 居住者の基本的特性

		世帯区分(種別:%)				単身の性別(種別:%)				世帯主の年齢(%)
		単身	複数	種別	割合	男	女	種別	割合	
住宅型	マンション	69	9.9	224	38.1	17	4.5	52	16.3	8.6
	鉄賃アパート	266	38.3	244	41.5	138	36.7	128	40.1	50.2
	木賃アパート	360	51.8	120	20.4	221	58.8	139	43.6	41.2
	不明	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0.0
	χ^2 検定	単・複***				男・女***				
世帯主年齢	24歳以下	234	33.7	33	5.6	151	40.2	83	26.0	32.3
	25～29歳	137	19.7	47	8.0	84	22.3	53	16.6	22.2
	30～34歳	84	12.1	74	12.6	52	13.8	32	10.0	10.3
	35～39歳	52	7.5	92	15.6	26	6.9	26	8.2	8.1
	40～44歳	40	5.8	84	14.3	18	4.8	22	6.9	7.4
	45～49歳	23	3.3	73	12.4	9	2.4	14	4.4	4.5
	50～59歳	54	7.8	102	17.3	17	4.5	37	11.6	5.6
	60歳以上	55	7.9	78	13.3	14	3.7	41	12.9	8.6
	不明	16	2.3	5	0.9	5	1.3	11	3.4	1.1
	(平均値)	33.4歳		43.5歳		30.0歳		37.6歳		33.6歳
世帯収入	100万円未満	50	7.2	11	1.9	18	4.8	32	10.0	13.7
	100～200万円	127	18.3	11	1.9	79	21.0	48	15.0	20.8
	200～300万円	142	20.4	28	4.8	73	19.4	69	21.6	24.9
	300～500万円	191	27.5	117	19.9	97	25.8	94	29.5	25.5
	500～700万円	60	8.6	116	19.7	41	10.9	19	6.0	6.8
	700～1000万円	33	4.7	116	19.7	18	4.8	15	4.7	1.9
	1000万円以上	23	3.3	128	21.8	13	3.4	10	3.1	1.3
	不明	69	9.9	61	10.4	37	9.8	32	10.0	5.0
	(平均値)	362万円		768万円		373万円		349万円		289万円
	χ^2 検定	単・複***				男・女***				
世帯主職業	経営者・役員・専業主婦・専業主夫	71	10.2	80	13.6	35	9.3	36	11.3	9.2
	経営者・役員・専業主婦・専業主夫	37	5.3	129	21.9	26	6.9	11	3.5	1.6
	経営者・役員・専業主婦・専業主夫	116	16.7	87	14.8	68	18.1	48	15.0	26.1
	経営者・役員・専業主婦・専業主夫	96	13.8	48	8.2	25	6.6	71	22.3	
	経営者・役員・専業主婦・専業主夫	80	11.5	71	12.1	44	11.7	36	11.3	18.1
	経営者・役員・専業主婦・専業主夫	26	3.7	17	2.9	24	6.4	2	0.6	9.6
	経営者・役員・専業主婦・専業主夫	44	6.3	29	4.9	20	5.3	24	7.5	6.5
	経営者・役員・専業主婦・専業主夫	151	21.7	10	1.7	107	28.5	44	13.8	19.8
	経営者・役員・専業主婦・専業主夫	48	6.9	75	12.8	11	2.9	37	11.6	8.0
	経営者・役員・専業主婦・専業主夫	26	3.7	42	7.1	16	4.3	10	3.1	1.1
通勤時間	30分未満	159	22.9	169	28.7	91	24.2	68	21.3	32.2
	30～45分	100	14.4	92	15.7	41	10.9	59	18.5	22.9
	45～60分	76	10.9	79	13.4	43	11.4	33	10.3	14.9
	60分以上	16	2.3	21	3.6	10	2.7	6	1.9	8.1
	その他	199	28.6	85	14.5	108	28.7	81	25.4	21.9
	不明	145	20.9	142	24.1	83	22.1	72	22.6	
	(平均値)	33分		34分		34分		33分		35分
合計		695	100.0	588	100.0	376	100.0	319	100.0	100.0

注1) 東京都単身全体のデータは、昭和63年住宅需要実態調査による集計。ただし、世帯主職業は昭和58年同調査による。

注2) 検定は、*** $P < 0.1\%$ 、** $P < 1\%$ 、* $P < 5\%$ 。

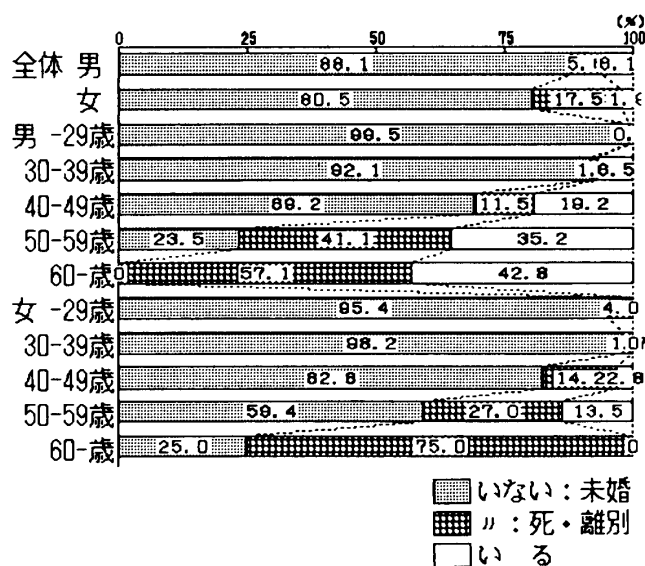


図 2. 単身世帯の配偶者（妻又は夫）の有無

の再集計によって求めた東京都の単身世帯全体と比較すると（以下、東京都の単身世帯全体のデータは同調査による）、調査地区内の「単身」は「木賃アパート」の比重がやや高い。「複数」では、「鉄賃アパート」42%と「マンション」38%の居住が中心で、「木賃アパート」の居住は少ない。単身の性別では、「男」は「木賃アパート」が59%と高いが、「女」は44%と少ない。

3) 世帯主年齢、世帯収入（表2）

世帯主の平均年齢は、「単身」が33歳でこれは東京都単身全体の平均年齢とほぼ一致する。年齢別では24歳以下の若年層が多いが、30歳以上の中・高年層も半数近くを占めている。「複数」の平均年齢は44歳とかなり高くなる。単身の「男」は30歳、「女」は38歳で女性の年齢の方が高い。これは、男性では24歳以下の若年層が多いことに対し、女性では50歳以上の高年層が多く含まれることによる。高齢単身者に女性が多いことは、高齢者対策の面からも注目しておく必要がある。

世帯収入の平均は、「単身」が362万円である。これは、東京都単身全体より73万円多く、単身世帯の中では高い水準にある。しかし、収入層の多くは100～300万円に集中していることから、一般世帯と比べれば全体的には低収入層に位置する。「複数」の平均は768万円と高い。単身の「男」の平均は373万円、「女」は349万円と男性の収入の方が高い。

4) 世帯主職業、通勤時間（表2）

世帯主の職業では、職業を持たない単身者が約3割

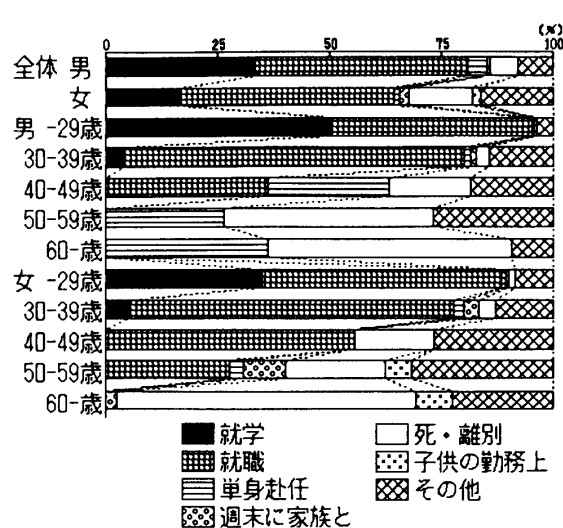


図 3. 単身世帯の一人で生活している理由

（「学生」22%、「無職」7%）を占める。有職者の中では、「専門・技術職」17%や「事務職」14%が多い。これを東京都単身全体と比較すると、「役員・管理職」、「専門・技術職」、「事務職」が多い反面、「販売・サービス職」、「技能・労務職」が少ない。すなわち、ホワイトカラー系の単身者の比重がやや高くなっている。「複数」では、「自営・自由業」や「役員・管理職」が多い。「単身」の「男」では「学生」29%、「女」では「事務職」22%と「無職」12%の多いことが目立つ。

通勤時間は、平均でみると「単身」は33分で、東京都全般の通勤事情からみて比較的短い。東京都単身全体の平均でも35分と短く、単身者全体が利便性のよい立地条件を選択して居住していることが分かる。「複数」の平均は34分で、「単身」との差はほとんどない。単身の「男」は34分、「女」は33分である。通勤時間では、世帯区分別、性別とも有意差がみられない。

(2) 単身化の状況

1) 配偶者の有無（図2）

配偶者の有無では、単身者の場合、配偶者のいないものが圧倒的に多く、単身の「男」で94%、「女」で98%を占める。配偶者の有無は、年齢層によって大きく変わる。[～29歳]、[30歳代]では、男女とも「未婚」による単身者が大半を占めている。[40歳代]から「死・離別」によって配偶者のいないものが増え始め、[50歳代]以降に急増する。また、「男」は年齢層が高くなるにつれて配偶者のいるものが増えるが、これは単身赴任の増加によると考えられる。この点、「女」は配偶者のいるものは少なく、未婚が多い。

単身世帯の住生活と住要求に関する研究 (第1報)

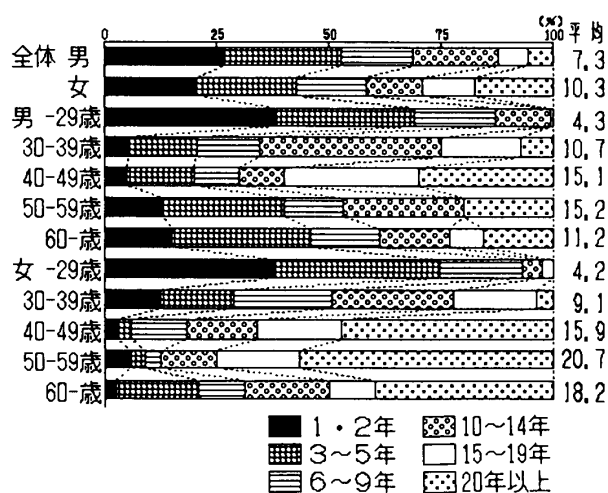


図 4. 単身世帯の一人の生活となつてからの年数

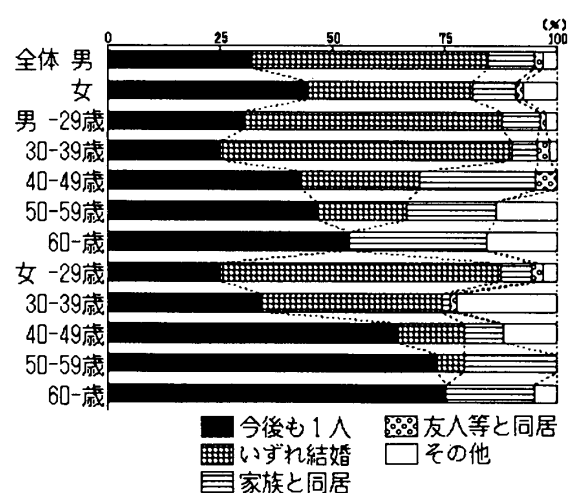


図 5. 単身世帯の今後の結婚, 同居等の予定

2) 一人で生活している理由 (図3)

一人で生活している理由をみると,「就学」は[男]が3割,[女]が2割である。「就職」は男女とも5割程度あり,単身化の最も大きな理由になっている。このほか[男]は「単身赴任」,[女]は「子供の勤務上」の都合による理由が目立つ。年齢別では,単身化の理由に大きな相違がみられる。[~29歳]の若年層では「就学」を理由とする比重が高く,[男]はそれが約半数を占める。[30歳代]は男女とも「就職」が多くなる。[40歳代]から「死・離別」が増え始め,[50歳代]の高年層で急増する。また[男]は,同時に「単身赴任」も多くなるが,これは先の配偶者のいる割合が高くなる傾向とも一致する。

3) 一人の生活となつてからの年数 (図4)

一人で生活するようになってからの年数は,平均でみると[男]が7.3年,[女]が10.3年で女性の方が長い。「10年以上」の長期の単身者は,女性では6割も存在する。年齢別では当然のことながら,男女とも若い年齢層の方が単身の期間が短い。年齢の上昇に応じて単身の期間は長期化するが,それも高年層の[50歳代]をピークに,[60歳~]では逆に短くなる。これは,高年齢層になると,死別による単身化が増加することによる。また[50歳代]以降になると,男女間の単身期間の格差が大きくなり,女性で長いことが目立つ。女性は,未婚の高齢単身者が多いこと,夫との死別が多く,かつ死別後の期間が長いことなどで長期化していると考えられる。

4) 今後の結婚,同居等の予定 (図5)

今後の予定に関して,「今後も一人」とするものは,

[男]で3割,[女]で4割とかなり多い。残りは「いずれ結婚」を予定しているものが多く,「家族と同居」や「友人等と同居」は少ない。年齢別では,[~29歳]の若年層において,「今後も一人」が2.5~3割を占め,結婚を予定しない若い男女の存在が目立つ。これは[30歳代]でもほぼ同様の傾向にある。[40歳代]になると,「今後も一人」は急速に増加するが,その比率は[男]より[女]の方が高い。年齢層が高くなるに従って,一人暮らしの志向は女性の方が強くなる。他方,「家族と同居」は,[男]は[40歳代]以降,[女]は[50歳代]以降に増加する。

(3) 住生活の状況

1) 日常生活の時間 (図6, 図7, 表3)

一日の生活行動の中で起床と就寝,外出と帰宅の時刻を平日と休日に分けてとらえることで,日常生活時間の概要をみることにする。

図6で,平日における生活行動の時刻をみる。起床は[単身],[複数]とも「6~7時」が最も多い。しかし,[単身]については「8~9時」もやや多く,外出直前までゆっくり寝ている状況が読み取れる。就寝は[単身],[複数]とも「23~0時」が多いが,[単身]では「1~2時」の深夜遅くまで起きているものが目立つ。外出は,[単身],[複数]のいずれも「8~9時」の一般通常の出勤時刻に集中している。帰宅は,[単身],[複数]とも「19~22時」と遅い。

図7は,休日の場合の時刻を示している。起床は[単身],[複数]とも平日の時刻よりかなり遅いが,就寝は平日の時刻とほとんど変わらない。外出は[単身],[複数]とも「10~14時」の正午前後が多い。

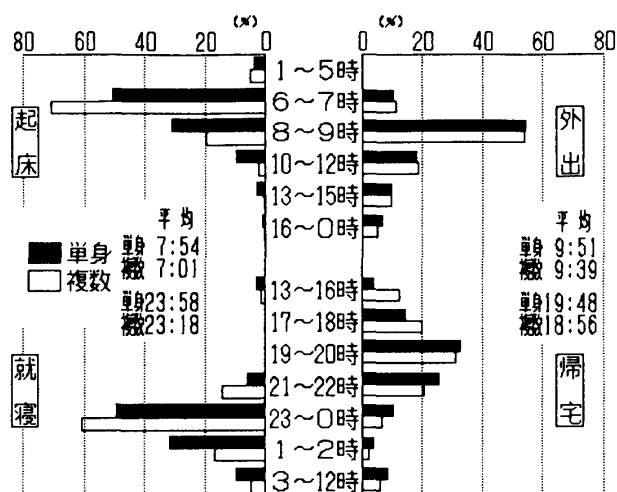


図 6. 平日の起床, 就寝, 外出, 帰宅の時刻

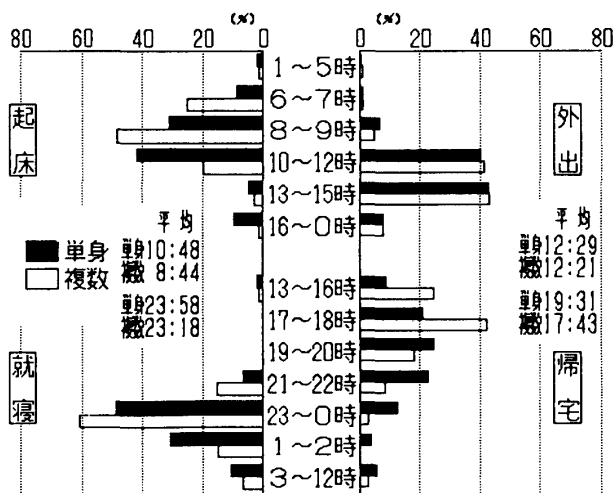


図 7. 休日の起床, 就寝, 外出, 帰宅の時刻

帰宅は「複数」では「17~18時」と早めに帰宅しているが、「単身」では平日と同様に遅い。

表3によって、以上の日常生活時間を単身世帯の性別、年齢別に平均値でみる。平日の場合、[男]は[女]より起床、就寝とも30分前後遅い。外出は[女]の方が30分ほど遅いが、帰宅は50分ほど早い。したがって、家にいる在宅時間は、女性の方が長くなる。休日の場合でも、男女相互間の時間関係はほぼ同一である。

年齢別では、全体に[40歳代]以下の若年層や中年層の差異はそれほど大きくはないが、[50歳代]以降の高年層、とくに[60歳~]で明瞭な差異が表れる。[60歳~]では、平日の起床は[男]6:43、[女]6:47、就寝は[男]21:47、[女]22:42である。これを若年層や中年層と比較すると、高齢者は男女とも

表 3. 単身者の平日, 休日の生活時間 (平均)

	平 日 (時刻)				休 日 (時刻)			
	起床	就寝	外出	帰宅	起床	就寝	外出	帰宅
全体 男	8:07	0:12	9:38	20:12	11:25	0:06	12:18	19:55
女	7:40	23:43	10:05	19:21	10:05	23:48	12:43	19:02
男 ~29歳	8:13	0:35	9:35	20:11	11:36	0:32	12:14	20:04
30~39歳	8:15	23:36	9:34	20:23	11:27	23:50	12:21	20:22
40~49歳	8:16	0:02	9:44	20:52	11:00	23:55	12:50	18:53
50~59歳	8:16	23:12	10:14	19:17	11:48	22:28	12:46	17:54
60歳~	6:43	21:47	9:36	20:18	8:00	20:40	11:12	18:00
女 ~29歳	7:44	0:03	9:29	19:38	10:31	0:16	12:09	19:48
30~39歳	7:51	0:04	9:28	19:42	11:03	23:50	13:00	19:26
40~49歳	8:02	23:17	11:02	18:53	10:14	23:55	12:49	19:00
50~59歳	7:35	23:12	11:24	19:22	8:38	22:45	13:58	17:12
60歳~	6:47	22:42	11:00	18:02	8:16	22:41	13:06	16:23

就寝、起床とも早い。しかし、起床については、7時近い時刻での起床であり、一般的には決して早い時刻というわけではない。外出や帰宅は、[男]では年齢別の差異は小さいが、女性は[40歳代]以降で遅く外出し、早く帰宅する傾向にある。こうした平日にみられる年齢層別の相対的な時間関係は、休日についても類似している。

2) 家事の頻度 (図8, 表4)

図8によって、日常の主要な家事の頻度状況を見る。部屋のそうじは、[単身]は「週に1回」程度が多く、[複数]は「ほぼ毎日」することが多い。これを一カ月の平均回数に換算すると、[単身]は約9回になるが、[複数]は約19回と多くなる。自宅で行う洗濯も、[単身]は月約10回程度であるが、[複数]は約21回となる。コインランドリーにおける洗濯は、[単身]でも約3回程度にすぎない。夕食の調理は、[単身]では「ほぼ毎日」が3割、月約13回と少ないが、[複数]ではそれが7割、約24回と多くなる。したがって、夕食を外食でとる回数をみると、[単身]は月約15回と増え、夕食の調理が少ない分外出に依存していることが分かる。近所の商店における食品等の買物は、[単身]は月約13回、[複数]は自宅での炊事が多いため約20回となる。デパート等での食品等の買物は、[単身]、[複数]とも月約3~4回とそれほど多くはない。全体に[複数]では、自宅でのそうじや洗濯、調理、また近所の商店での買物の頻度が高く、家庭を中心とした日常生活が展開されている。

表4は、以上の家事の頻度を性別、年齢別に一カ月当たりの平均回数で示している。家事の頻度については、男女間で大きな格差がみられる。部屋のそうじは[男]が月約6回、[女]が約12回、自宅での洗濯は[男]月約7回、[女]約13回、調理(夕食)は[男]月約8回、[女]約19回である。すなわち、そうじ、

単身世帯の住生活と住要求に関する研究（第1報）

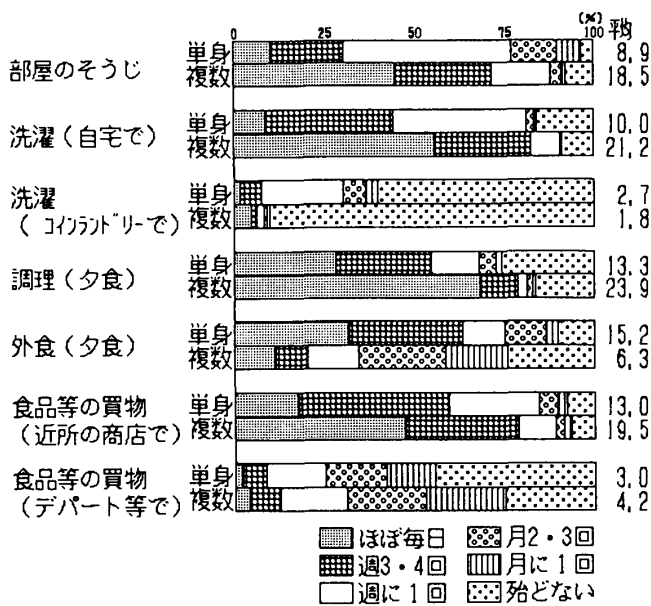


図 8. 家事の頻度

表 4. 単身者の家事の頻度（一カ月当たり平均回数）

	部屋 のそうじ	洗濯 ・自宅 で	洗濯 ・ド コ イン で	調理 ハ 夕 食	外 食 ハ 夕 食	食 品 等 の 商 店 買 物 で	食 品 等 の 商 店 買 物 で
全体 男	6.0	6.8	3.5	8.1	19.3	11.2	2.1
全体 女	12.3	13.3	1.7	19.1	10.1	15.2	4.2
男 ~29歳	5.1	6.2	3.7	7.4	20.5	12.2	2.1
男 30~39歳	6.0	5.5	3.0	6.9	19.6	9.5	1.6
男 40~49歳	6.9	9.6	2.1	7.7	13.8	6.3	0.7
男 50~59歳	11.1	11.3	4.7	14.0	15.6	10.7	6.4
男 60歳~	12.9	15.7	3.8	21.7	12.3	15.0	4.4
女 ~29歳	11.1	12.5	1.3	16.4	11.9	15.0	3.9
女 30~39歳	9.8	11.7	0.6	17.4	10.1	12.6	2.7
女 40~49歳	11.4	14.0	0.8	19.9	9.6	13.7	3.2
女 50~59歳	16.5	16.2	4.4	22.3	7.2	17.1	8.1
女 60歳~	15.1	14.1	3.8	25.3	5.4	18.5	4.7

洗濯、調理は、女性の方が男性より倍近い頻度で小まめに行っている。また、近所の商店やデパートでの食品等の買物回数も女性の方が多い。他方、洗濯（コインランドリー）や夕食（外食）の頻度は男性の方が高く、とくに夕食については、男性の場合、外食で済ませている場合が多い。

年齢別にみると、男女ともいずれの家事の頻度についても[40歳代]までの若年層や中年層が近似し、[50歳代]以降の高年層との格差が大きい。男性でも[50歳代]以降になると、部屋のそうじ、自宅での洗濯、調理（夕食）の頻度は高く、女性の若年層、中年層と変わらない。また、年齢層が高くなるに従って、男女とも夕食を外食でとることは減少し、自宅での夕

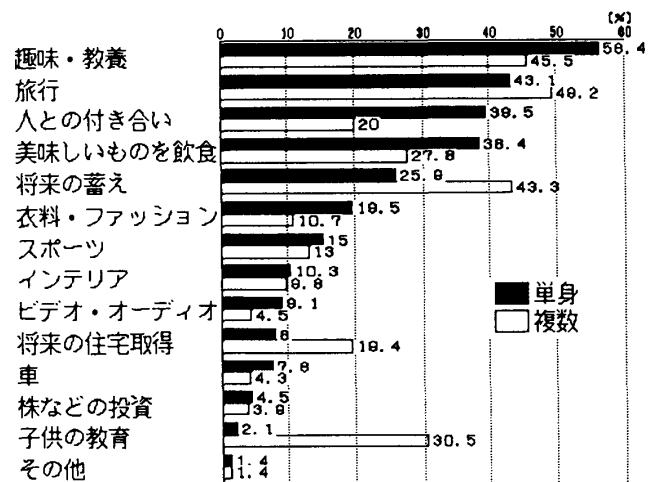


図 9. 普段「お金をかけたい」というもの（複数解答）

表 5. 単身者の普段「お金をかけたい」というもの（25%以上の項目を選出）

	趣味・ 教養	旅 行	人 合 い の 付 き	美 味 し い 食 物 を 飲 み	将 来 の 蓄 え	衣 着 ・ フ ァ ッ シ ョ ン	ス ポ ー ツ
全体 男	55.9①	35.8③	45.2②	31.4④	21.8	13.6	20.3
全体 女	57.0①	51.8②	32.9④	46.6③	30.6⑤	26.4⑥	8.8
男 ~29歳	64.1①	31.8③	44.4②	27.8④	16.6	17.5	25.1⑤
男 30~39歳	44.0②	29.3⑤	50.7①	30.7④	34.7③	8.0	10.7
男 40~49歳	46.2②	61.5①	42.3③	42.3③	30.8⑤	3.8	15.4
男 50~59歳	38.5③	69.2①	30.8④	53.8②	30.8④	7.7	13.1
男 60歳~	23.1	61.5①	46.2③	53.8②	15.4	0.0	7.7
女 ~29歳	61.9①	53.7②	29.9⑤	53.7②	20.9	35.8④	9.7
女 30~39歳	56.1①	38.6②	38.6②	38.6②	33.3⑤	24.6	8.8
女 40~49歳	50.0①	47.2②	33.3⑤	38.9④	41.7③	25.0⑥	11.1
女 50~59歳	40.0③	60.0①	37.1④	51.4②	31.4⑤	11.4	8.6
女 60歳~	61.8②	64.7①	32.4⑤	38.2④	41.2③	8.8	2.9

注) 3つ選択の複数回答%。○の数字は、25%以上の項目についての順位。

食が増加する。

3) 生活の志向（図9、表5）

仕事以外の面で価値を置いている生活志向をとらえるために、普段「お金をかけたい」と思っていることながらを14項目設定し（「その他」を含む）、そのうち3項目を選ぶ複数選択回答によってみることにする。

図9では、[単身]、[複数]とも「趣味・教養」、「娯楽」に関しては、全項目中1位、2位を占め、生活面で高い価値を置いていることを示す。[単身]と[複数]で大きく異なる内容は、[単身]では「人との付き合い」40%、「美味しいものを飲食」38%などが多いが、[複数]では「将来の蓄え」43%、「子供の教育」31%などが多い。すなわち、[単身]は個人の生

表 6. 住宅や住まい方に関する質問項目

A. 《くつろぎ・だんらんに対する意識》
01: 家の中で本当に楽な姿勢でくつろぐためには、多少格好や行儀が悪くてもしかたがない。
02: 家はくつろぐための場所であって、仕事などは家に持ち込みたくない。
03: 家族が集まって食事やだんらんをするときには、一家の主人が一番良い席に座るべきだ。
B. 《間取りに関する意識》
04: 趣味や仕事を中断しても、そのまま道具をひろげておける部屋を是非とも作りたい。
C. 《和洋に関する志向》
05: 洋間より和室の方がくつろげる。
D. 《インテリアのデザインについて》
06: 住みよい住まいなら、広さや見栄にはこだわらない。
07: 住みやすい住宅であれば、デザインにはこだわらない。
08: 多少仕上がりは悪くとも、自分でいろいろ手を入れて自分らしいインテリアを作りたい。
E. 《立地の選択に関する意識》
09: 多少家が狭くとも、どこに出かけるにも便利な都心に住みたい。
10: 多少遠くなくても、空気がきれいで健康的なところに住みたい。
F. 《将来の生活変化への対応について》
11: 今は無駄かもしれないが、老後のことを配慮した家づくりをしたい。
12: 将来子供が独立したら夫婦で都心のマンションに住みかえて、新たな生活を始めたい。
G. 《住宅を取り巻く経済感覚》
13: 多少無理しても、将来のことを考えて、財産価値のある家に住みたい。
H. 《コミュニティの意識》
14: 普段家の中からは見えなくても、出窓やベランダに花などを飾って道行く人々にも楽しんでもらいたい。
I. 《社会参加の意識》
15: 隣人や向かいの人だけでなく、近所や地域の人々とも積極的につきあっていきたい。
J. 《住宅の安全性について》
16: マンション等の集合住宅には、常駐の管理人が絶対に必要である。
K. 《住宅・生活維持を他人にまかせることについて》
17: 多少費用がかかっても、家事等の時間を短縮してくれるサービスや機器があればどんどん利用したい。
18: それほど割高でなければ、台所設備や家具等を買わずに借りる（リース）ことも積極的に検討したい。
L. 《共有施設に関する意向》
19: 十分な駐車設備を備えるためには、遊び場や緑が少なくてもしかたがない。

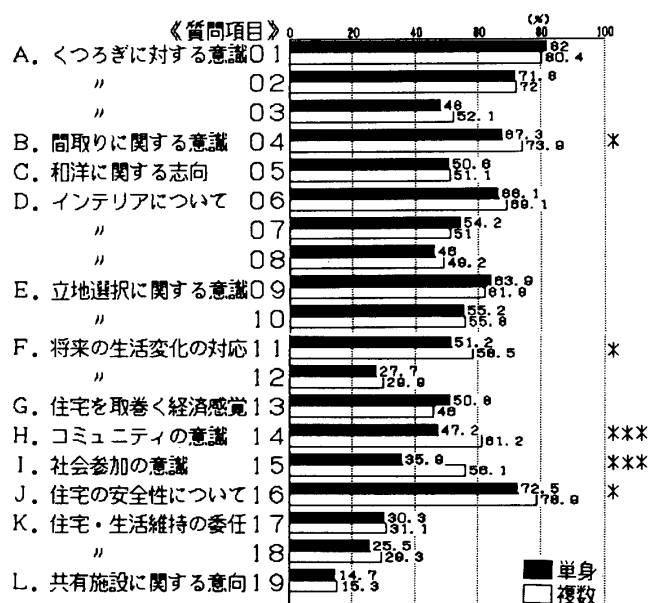


図 10. 世帯区分別住宅や住まい方についての考え方
質問項目は、表 6 参照。有意差を χ^2 検定: *** $p < 0.1\%$,
** $p < 1\%$, * $p < 5\%$ 。

「旅行」、「美味しいものを飲食」、また「女」は「旅行」の志向が高くなる傾向に変わる。

(4) 住宅や住まい方に対する考え方

1) 世帯区分別特徴 (表 6, 図 10)

表 6 に示すように、住宅や住まい方に関する質問項目は、それが広範囲な内容を含むように 19 項目とした。各質問項目ごとに、①まったくそう思う、②まあそう思う、③あまりそうは思わない、④全然そうは思わない、⑤答えられないの回答を用意し、このうち、⑤を除いた①～④の中で、①、②の占める比率を求めた。

図 10 は、[単身] と [複数] の比率を示したものである。単身世帯の住宅や住まい方に対する考え方の特徴をみるため、ここでは [単身] や [複数] で比較的高い比率を示す項目の中から、両者の比率の格差の大きさに注目する。それが大きい項目は、H. コミュニティの意識 (項目の番号 (14)、以下同様に表記する)、I. 社会参加の意識 (15) であり、[単身] の比率がかなり低い。一般的に単身世帯は地域社会への関心が低いとみられているが、この場合にも地域の人々との付き合いや関わりには消極的な姿勢がうかがわれる。地域コミュニティを形成するうえで、一つの課題を示唆している。次は、F. 将来の生活変化への対応 (11) に関する項目である。これも [単身] の比率が低く、

活を大切にしたい志向であるが、[複数] は将来を見通した家族生活の充実を第一義とした志向であることが読み取れる。

表 5 は、[単身] で 25% 以上の比率を占める項目を性別、年齢別に示している。性別では「趣味・教養」が 1 位と高いことは、男女で共通している。しかし、2 位以下については、[男] が「人との付き合い」45% が多いことに対し、[女] は対照的に「旅行」52%、「美味しいものを飲食」47% が多い。年齢別にみて、この傾向は、[~29 歳] の若年層にも同様に表れている。しかし、[30 歳代] になると、[男] では「人との付き合い」を重要とする志向が最も強くなる。[40 歳代] 以降は、年齢層が高くなるにつれて、[男] は

単身世帯の住生活と住要求に関する研究 (第1報)

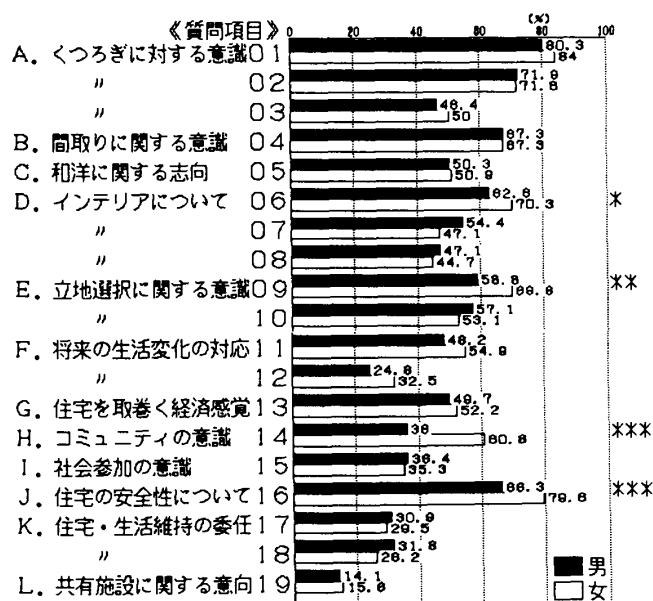


図 11. 性別住宅や住まい方についての考え方
質問項目は、表 6 参照。有意差を χ^2 検定: *** $p < 0.1\%$, ** $p < 1\%$, * $p < 5\%$ 。

「老後の住宅への配慮」の意識は「複数」より相対的に低い。また、B. 間取りに関する意識 (04)、J. 住宅の安全性 (16) でも「単身」の比率が低い。

2) 性別、年齢別特徴 (図 11, 図 12)

図 11 は、性別の比較で示したものである。男女間で格差が大きい項目は、H. コミュニティの意識 (14)、J. 住宅の安全性 (16) であり、いずれも「女」の比率の方が高い。すなわち、「出窓やベランダに花を飾る行為」や「常駐の管理人の必要性」の意識が低いのは、単身世帯でも男性についてのみ言えることであり、女性では逆に高い意識を持っていることを示している。ただし、I. 社会参加の意識 (15) は、女性の場合でもかなり低く、地域の人々との交流に対しては基本的に無関心である。次は、E. 立地選択 (09) に関する項目である。女性の場合、「多少家が狭くとも便利な都心に住みたい」とする都心居住志向の高いことが特徴的である。また、D. インテリアのデザイン (06) では、女性は「住みよい住まいなら広さや見栄にこだわらない」とする考え方が強い。

図 12 は、以上を年齢別に比較したものの中から、有意差のある項目だけを抽出して示している。「男」で年齢別格差が大きい項目は、A. くつろぎに対する意識 (02) と H. コミュニティの意識 (14) である。このうち A. くつろぎに対する意識 (06) は、[30 歳代]、[40 歳代] の中年層で低い。また H. コミュニテ

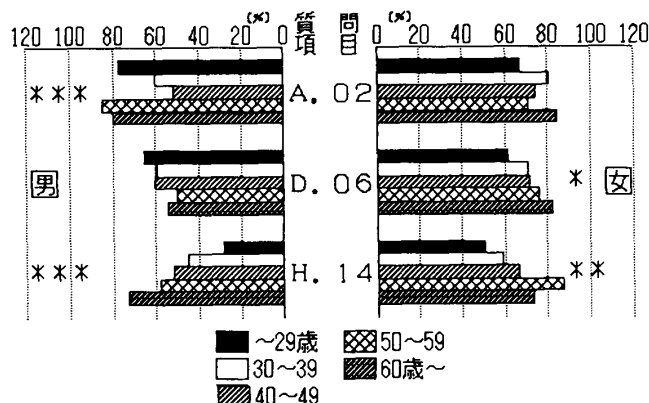


図 12. 年齢別住宅や住まい方についての考え方

ィの意識 (14) の項目では、年齢層が高くなると「出窓やベランダに花を飾る行為」が積極的になる関係にある。「女」については、年齢別格差が大きい項目は D. インテリアのデザイン (06) と H. コミュニティの意識 (14) である。年齢層が高くなると、「住みよい住まいなら広さや見栄にこだわらない」、「出窓やベランダに花を飾る行為」の意識が高くなる。一方、F. 将来の生活変化への対応 (11) や J. 住宅の安全性 (16) などは、高年層で高い意識が表れるものと予想されるが、実際には若年層や中年層と有意な差異を示さない。これは、高年層ではマンション居住が多く、既に安定した居住条件を確保できているものが多いこと (この点は、次報で報告する予定である)、男性の単身赴任者などいずれ家族と同居することを予定しているものが多いことが起因しているとみられる。

4. 要 約

以上の結果は、次のように要約される。

(1) 単身世帯の基本的特性として、住宅は賃貸アパートが大半であり、男性では木造賃貸アパート居住の割合が高い。世帯主の年齢層の多くは若年層であるが、中・高年層の単身者も半数近くを占める。女性に、高齢単身者が多い。収入は、一般世帯と比較すればかなり低い。職業は、ホワイトカラー系の比率が高い。通勤時間は、比較的短い。こうした単身世帯の基本的特性は、通勤時間の点を除いて男女間の格差が明瞭である。

(2) 単身化の理由は年齢層で異なり、若年層の男性では「就学」が目立つ。30 歳代の中年層では「就職」、高年層で「死・離別」が増加し、とくに高年層の男性は「単身赴任」が多く、配偶者のいる割合が高い。単

身の期間は、年齢層が高くなると長期化するが、60歳以後は逆に短くなる。女性の高年層の単身期間が長い。結婚、同居等の予定は、若年層の段階でも「今後も一人」とするものが3割近くも存在する。40歳代の中年層以降は、一人暮らしの志向がますます強まる。

(3) 単身世帯の平日の生活時間は、遅い起床・遅い就寝、通常外出・遅い帰宅である。休日の生活時間は、平日より起床、外出とも遅いが、就寝、帰宅は変わらない。平日における単身の男性は、女性より起床、就寝とも遅く、外出は早いが帰宅は遅い。休日でも、男女間の生活時間の関係は同じである。年齢別では、60歳以上の高齢単身者は就寝は早い、起床は特別早いわけではない。

(4) 単身世帯の家事の頻度は、相対的に低い。しかし、単身の性別による格差は大きい。女性の場合、そうじ、洗濯（自宅）、調理（夕食）、買物の頻度が高い反面、男性では低く、とくに夕食を外食の形でとることが多い。年齢別では、高年層になると男女とも家事の頻度が高くなり、夕食（夕食）への依存が減少する。

(5) 単身世帯では、お金をかける価値のある生活志向の中心は「趣味・教養」、「娯楽」であるが、二義的には個人の生活重視の傾向がうかがわれる。性別では「趣味・教養」の次は、男性は「人との付き合い」、女性は「旅行や飲食」に分かれる。年齢別では、30歳代の中年層の男性で「人との付き合い」志向が最も強くなる。40歳代以降の年齢になると、男性は「旅行」、「美味しいものを飲食」、女性は「旅行」の志向が高く

なる。

(6) 単身世帯の住宅や住まい方に対する考え方の特徴は、複数世帯と比べて地域の人々との付き合いや関わりに消極的であること、高年層においても老後の住宅への配慮の意識が低いことにある。性別では、女性は出窓やベランダに花を飾ること、常駐の管理人を確保することへの意識が高い。広さや見栄より住みよい住まいであることが重要であり、都心居住への志向も強い。年齢別の傾向として、男女とも年齢層が高くなると出窓やベランダに花を飾る行為が積極的となり、また女性は住みよい住まいを求める志向が高くなる。男性では、中年層でくつろぎに対する意識が低い。

本報告は、「首都圏における単身居住者に関する調査研究（主査：三宅醇）」の一環として実施した作業の内容を、本研究の目的に則して分析し直したものである。本研究をまとめるに際し、有益なご助言をいただいた豊橋技術科学大学三宅醇教授はじめ、多くの関係の方々に深く感謝する次第である。

引用文献

- 1) 鈴木博志：日本建築学会東海支部研究報告集，第30号，585～588（1992）
- 2) 谷本道子，藤原三恵子：1990年度日本建築学会大会学術講演梗概集，広島，533～536（1990）
- 3) 大江守之：1991年度日本建築学会大会学術講演梗概集，仙台，483～484（1991）
- 4) 高阪謙次：家政誌，41，333～340（1990）